

【第3回 関西日本ラトビア協会総会 開催】



平成23年10月20日 大和ハウス大阪ビル

ペーテリス・ヴァイヴァルス特命全権大使ならびに大使館員のオレグス・オルロフスさん、ダナ・ルダーカさんをお迎えして、天江喜七郎会長はじめ約50名の会員が集い、第3回の関西日本ラトビア協会（略称 JLSK Japan-Latvian Society in KANSAI）の総会が開催されました。



【ご出席者一覧】順不同・敬称略

天江喜七郎	荒木美真	有友美智男	池田裕子	石原美生子	岩崎泰祐	岩崎和子	上野慶三	牛島国夫	太田敏正	岡林昌弘
垣田英策	木村宗光	小原英明	権藤真禎	笹井幹男	酒見信義	佐々木実	清水 格	清水郁美	正司泰一郎	杉山良夫
竹村 肇	立岡 弘	田中立子	谷本瑞絵	鶴丸時長	寺岡志郎	東郷 武	東郷久野	富永章之	鳥尾二郎	蓮池 寛
早川明弘	平越國和	藤本昌男	古田晴彦	古田 睦	風呂本武敏	本多敬一	益田信行	松本 宏	溝口明子	安田 勝
山原一晃	三木保人	小林正明	金井雅孝	鶴田宜江	ヴァイヴァルス大使	オレグス・オルロフス	ダナ・ルダーカ			

【関西日本ラトビア協会 会報 第6号 掲載内容】

- | | |
|--|---------------------------------------|
| 1. 第3回JLSK総会・懇親会開催 | 6. 【寄稿】大使館で行われたオレグスさんの壮行会
(池田裕子理事) |
| 2. 「アヴェ・ソル」芸術監督ウルディス・コカース氏来日 | 7. 【寄稿】ラトビア訪問記(名島弘尚さん) |
| 3. 【寄稿】ヴァイヴァルス大使を関西学院にお迎えした2日間
(池田裕子理事) | 8. 在大阪エストニア名誉領事館開設 |
| 4. 【寄稿】桃井かおりさんがリガ市名誉文化大使に就任
(長内敬駐ラトビア日本国大使) | 9. 【寄稿】リガコレクション(川島容次郎さん) |
| 5. 【寄稿】キンズーリス氏の日本国外務大臣表彰(平田純一さん) | 10. 東郷名誉領事が中学生に講義 |
| | 11. 【寄稿】アルスンガ村での温かな生活(鶴田宜江さん) |

【総 会】東郷武理事長（在大阪ラトビア共和国名誉領事）より、丸3年を迎えた協会の活動について振り返られ、会員の皆さまのご支援に対してお礼の言葉が述べられました。



東郷武名誉領事



ヴァイヴァルス大使



オレグス・オルロフスさん



ダナ・ルダーカさん

総会の後、ヴァイヴァルス大使から「ラトビアの最新事情」と題して、オレグス・オルロフスさんの随時通訳による講演をしていただき、ラトビア共和国の経済が、政府主導で国民が身を切る努力を行い、かつ成長戦略への積極的投資によって、今年はリーマンショック後の金融危機から脱し明るい将来ビジョンを描けるまでに回復されたといううれしい報告をしていただきました。

なお、ラトビア語教室の溝口明子さんと京都大学大学院の鶴田宜江さんのお二人が、総会の受付時間からラトビアの民族衣装を身にまとい雰囲気を盛り上げてくれました。



総会風景（左・中）と民族衣装で参加してくれた溝口明子さんと鶴田宜江さん（右）

【関西日本ラトビア協会 収支報告書】（平成22年4月1日 ～平成23年3月31日）（単位：円）

		金額	前年度実績
前期繰越金		1,791,231	2,106,785
収入の部	年会費等	227,000	142,000
	総会等催事会費	366,000	1,048,400
	受取利息	466	588
	合計	2,384,677	1,504,188
支出の部	総会等催事支出	711,289	1,376,872
	会報印刷代 送料	377,230	362,620
	広告宣伝費	73,710	0
	雑費	0	80,250
合計		1,162,229	1,819,742
次期繰越金		1,222,468	1,791,231



新任の太田敏正理事

【連絡事項】

理事異動：新任 太田敏正 様
 退任 森脇洋子 様 岡田 博 様 菊園武彦 様
 ※森脇様には退任にあたり協会へ寄付金2万円を頂戴しました。ありがとうございました。

会員数 ：177名（平成23年10月20日現在）

【懇親会】総会終了後は、全員で記念撮影を行った後、大阪マルビルに会場を移動し、なごやかに懇親会が催されました。懇親会冒頭にご挨拶いただいた天江喜七郎会長（元外務省関西大使）からは、ヴァイヴァルス大使と東郷名誉領事の活躍によって関西におけるラトビアの名前が徐々に知られるようになり、それに本協会も大いに寄与しているのとお言葉と、このたび6年間にわたる日本での任務を終えて本国へ帰任されるオレグス・オルロフスさんへの感謝の意が表されました。またオレグスさんからも参加の皆さんへのお礼の言葉が述べられました。後任のダナ・ルダーカさんからも着任挨拶がありました。



天江喜七郎会長挨拶



オレグスさん



ダナさん



乾杯は上野慶三常務理事



ヴァイヴァルス大使



懇親会では、山本純子さん（フルート）と轟木裕子さん（ピアノ）のお二人による「カルメン幻想曲」の演奏が行われました。ラトビア語教室のリンダ・ガルワーネ先生や来年ラトビアへ留学予定の関西学院大学の亀子さんなど多彩なゲストも参加してくれました。



山本純子さん（フルート）と轟木裕子さん（ピアノ）



中締め 正司泰一郎・常務理事



即売されたラトビア産石鹸とステンダース谷本さん



懇親会風景から



リンダ・ガルワーネさん



京都精華大学でマンガを
学ぶオルガさん



蓮池理事 古田晴彦さん 古田睦さん



関西学院大学亀子さん



新入会の三木保人さん



★たくさんのご参加ありがとうございました！★

合唱団「アヴェ・ソル」の芸術監督ウルディス・コカース氏来日

合唱の国ラトビアよりリガ室内合唱団「アヴェ・ソル」の芸術監督兼指揮者ウルディス・コカース氏が来日姉妹合唱団である神戸市混声合唱団の秋の定期演奏会「バルトの響き」（神戸文化ホール）にて指揮をされました。

2011年9月11日（日）



神戸市混声合唱団の秋の定期演奏会「バルトの響き」で指揮

神戸市混声合唱団は、昨年5月、神戸・リガ姉妹都市提携35周年記念の一環として首都リガ市を訪問し、リガ室内合唱団「アヴェ・ソル」と姉妹合唱団提携を結ばれました。今年9月に芸術監督兼指揮者のウルディス・コカース氏が来日、神戸市混声合唱団の秋の定期演奏会等に出演するため神戸にも来られました。公演終了後には、東郷名誉領事ご夫妻はじめ協会有志と懇親を深めました。



ウルディス・コカース氏を囲んで懇親会

【寄稿】 ヴァイヴァルス大使を関西学院にお迎えした 2 日間

池田裕子さん（関西学院・JLSK 理事）

ペーテリス・ヴァイヴァルス駐日大使を 3 年振りに関西学院にお迎えしました。10 月 20 日午前 11 時に新神戸駅にお迎えに上がり、翌日午後 5 時半同駅にお送りするまでの 2 日間の中から、印象に残った出来事をご紹介します。

まず、新神戸駅の改札口でオレグス・オルロフスさんの後任ダナ・ルダーカさんに初めてお会いしました。ダナさんの前任地は中国大使館で、日本には 8 月終わりに到着されたそうです。まばゆい金髪に笑顔がステキな女性で、ラトビア語、ロシア語、英語、中国語、日本語、フランス語、イタリア語（他にもまだあったような？）を話されるとお聞きし、目が眩みました。

新神戸から関西学院までの移動は、3 年前の教訓を生かして、大きな車を学長室が手配していました。長身の大使は、足が延せる席を確保されリラックス・ムードでしたが、本邦初のラトビア語スピーチ・コンテストを翌月に控えていたため、私にとっては苦しい時間になりました。と言うのは、大使からは英語で、オレグスさんからは日本語で、コンテストへの参加を熱心に勧められたからです。「まだ申し込んでいないようだけど、どうのこと？」「今からでも遅くない」「難しく考えず、気楽に参加して欲しい」等々。仮にスピーチ原稿の丸暗記ができたとしても、ラトビア語による質疑応答なんて、私にできるはずないではありませんか？！

関西学院では井上琢智（たくとし）学長がお待ちかねでした。正午からオハラホールで学長主催の歓迎昼食会が開催され、井上学長の他、ルース・M・グルーベル院長、平林孝裕大学宗教主事、藤井和夫国際教育・協力センター長、野村宗訓産業研究所長、伊藤正一国際学部長が出席しました。

和やかに会話が進む中、突然大使が「池田さんにお渡ししたいものがあります」とにつっこりされました。取り出されたのはラトビア共和国外務大臣からの感謝状でした。当の本人も驚きましたが、それ以上にビックリ仰天の面持ちだったのは昼食会出席者一同です。



「私の役割はイアン・オゾリン（90 年前に関西学院で教えていたラトビア人青年。ラトビア領事の役割をも果たしていました）のしていたことを引き継ぐことです。ラトビアのことを日本で多くの人に知ってもらえるよう努めていますが、大使館にいるラトビア人は私たち 3 人だけです。池田さんはオゾリンを発掘し、日本で有名にしてくれました。ハンス・ハンター（戦前のラトビア名誉領事）やクリスマスツリー（ツリーへの飾り付けを世界で初めて行ったのはリガの商人）のことも紹介してくれました…」もったいないお言葉に身の置き所もなかったのですが、何とかラトビア語でお礼を申し上げねばと思いました。「パルディエス！ エス テヴィ ミール！（Thank you! I love you!）」。咄嗟に私の口を突いて出たのは大使への愛の告白でした！

「感謝状のことを池田さんにバレないように訪問の準備するのは大変でした」と、私と頻繁に連絡を取っておられたオレグスさんは肩の荷を降ろされたようでした。新神戸駅でお迎えした時、「ラトビア人は日本人よりずっと力持ちだから」と言って、私を荷物から遠ざけておられた理由がやっとわかりました。その後、大使は、井上学長、グルーベル院長、伊藤国際学部長にそれぞれ異なるコインをプレゼントされました。



オハラホールをあとにし、国際学部主催の講演会場に向かう途中、大学図書館ロビーで開催中の「ラトビア歌と踊りの祭典」写真展に立ち寄りました。この写真展は、大使館からお借りした写真パネルを使って、西宮上ヶ原キャンパスと神戸三田キャンパスで1週間ずつ開催されたものです

国際学部連続講演会「バルトの真珠ーラトビア」は、午後1時半から3時までB号館203号教室で行われました。内容も興味深いものでしたが、ラトビア語で話される大使と日本語に通訳されるオレグスさんの息の合った名コンビぶりにも来場者は引き込まれたようです。質疑応答も活発で、「ラトビアに行く時覚えておいた方がいい言葉は何ですか？」との質問に対し、「ビールください」と大使が日本語でユーモラスにお答えになったのが印象的でした（その後、「ビールください」は関西学院でちょっとした流行語になっています?!）。講演の最後には、関西学院大学からラトビア大学への初の交換留学生となる亀子彩加さん（国際学部2年）に大使からラトビアの資料が手渡されました。

昨年4月に開設された国際学部では各国駐日大使による講演会を何度か行ってきましたが、今回は最多の200名にお集まりいただきました。京都大学大学院人間環境研究科の鶴田宜江さんはラトビアの民族衣装を着て来場し、花を添えてくださいました。関西日本ラトビア協会からも大勢お越しいただき、ありがとうございました。



国際学部連続講演



ラトビア協会の皆さん



亀子彩加さんとヴァイヴァルス大使

講演終了後、日本・ラトビア国交樹立 90 年、国交回復 20 年記念植樹のための苗木贈呈式（オークとシラカバ）が文学部北側で行われました。この件では、当協会常務理事の上野慶三さんと権藤眞禎さんに大変お世話になりました。オゾリン（ラトビア語で「オーク」の意味）を愛する私にとっては感激も一入でしたが、『(関西学院)学院史編纂室便り』第 34 号（2011 年 12 月 1 日）で詳しく紹介しましたのでここでは省きます。（<http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/LEFT.htm>）



神戸市立森林植物園にて保管いただいていた苗木（中央は権藤眞禎常務理事）



その後、大使には森下洋一理事長にもお会いいただき、最後に学長室に戻りました。学長室では、作務衣に着替えられた井上学長のお点前で一休みされました。その席で、オゾリンに関するラトビア語論文の翻訳をしてくださった神戸薬科大学の田中研治教授（写真左下）をやっと大使にご紹介することができました。



講演会参加者からの差し入れ

翌 21 日は神戸三田キャンパスにお連れするため、総合政策学部の大森則良さんと私とで午前 9 時にヴァイヴァルス大使とダナさんを大阪のホテルにお迎えに上がりました（オレグスさんは初日だけで東京に戻られました）。

中国道が工事のため渋滞が見込まれるとのことからお迎え時間を早めたのですが、車はスムーズに三田に到着しました。そこで、関西学院千刈キャンプ（和風 2 階建てキャビン、山小屋風キャビンの他、テント泊も可能で、ゼミ合宿や研修会、自然を活かしたレクリエーション、体験学習の場として利用されています）に急遽立ち寄ることにしました。

突然だったにもかかわらず、キャンプ場の益田博さんは快く迎え入れてくださいました。天気にも恵まれたせいもあって、気持ちの良い散策となりました。大使もダナさんも大喜びで「あちらにも歩いて行きたい」「時間はまだ大丈夫ですか？ もう少しいいですか？」と目を輝かせておられました。キャンプ場のシェフがここで採ったきのこを使って献立を考えることもあると益田さんが説明すると、大使が子どもの頃初めて手にしたお金は、自分で採ったきのこを売って得たものだとおっしゃいました。



「もう一度関西学院に来ることができたら、ぜひここに泊まりたい」との大使のお言葉に、「ラトビアとフレンドシップ・キャンプのようなものができればいいですね」と益田さんは応じられました。

神戸三田キャンパスでは、まず、石浦菜岐佐教授が理工学部をご案内くださいました。研究室のデモンストレーションで、博士研究員の饗庭絵里子さんによりラトビア国歌が演奏された時、大使もダナさんも目をまん丸にして喜ばれました。リガ工科大学ご出身の大使は「学生時代に戻ったようだ」と、理工学部訪問を殊の外喜ばれました。ダナさんも「この空気は東京と全然違う」と、自然を満喫されたようです。



総合政策学部での英語によるQ&A

総合政策学部では、高畑由紀夫学部長主催の昼食会の後、英語による講演”NINETY YEARS OF THE BILATERAL RELATIONS BETWEEN LATVIA AND JAPAN”がⅡ号館201号教室で行われました。出席者は90名ほどでした。ラトビア語の美しい響きを聞いていただけなかったのは残念でしたが、通訳の必要がない分、たっぷりお話を伺うことができました。大使の英語は聴き取りやすいので、学生から活発に質問が出ました。

講演会終了後、場所を移してさらにQ & Aの場が設けられました。そこには15名ほどの学生と高畑学部長が来られました。質問内容から、前もってラトビアについて勉強してきたことが明らかな学生もいて、大使は感心しておられました。

予定通り、午後4時半にキャンパスを後にしました。女子学生の一団が車まで見送りに来てくれました。大使は2日間のお疲れも見せず、にこやかに言葉を交わされました。やはり大使も若い女性がお好きなようですね？！

最後にダナさんは私にこうおっしゃいました。「今回の訪問を大使は心から楽しみにしておられました。実際に大使は本当に嬉しそうです。私はずっと大使と一緒にいて、そばで見ているからよくわかります。関西学院は大使にとって特別な場所なのです」。オゾリンの国の大使を再び関西学院にお迎えすることができて、私はさらに一步オゾリンに近づいたような気がしました。（終）

◆女優の桃井かおりさんが『リガ市名誉文化大使』に就任



ウシャコフス市長、マーティンソンス監督とともに

駐ラトビア日本国大使 長内 敬

8月18日（木）、女優の桃井かおりさんが、『リガ市名誉文化大使（Honorary Ambassador of Culture of the City of Riga）』に就任しました。

桃井さんは、2010年にラトビア人映画監督マリス・マーティンソンス氏制作の映画「AMAYA（雨夜）」に主演女優として出演し、同年9月同映画の封切りのためリガ市を訪問しましたが、これがきっかけとなってリガ市より日本との文化交流の橋渡し役となることを依頼されました。



私も同就任式に立ち会うためにリガ市庁舎を訪れましたが、複数のテレビ局を含む多くのラトビア・メディアが集まり、関心の高さが伺われました。それもそのはず、「AMAYA」は、アカデミー賞外国語映画部門のラトビア代表作に指定される等、ラトビア国内で大きな反響のあった映画である上、桃井さんの就任は、リガ市にとって初めての名誉文化大使任命ということも手伝って、大きな注目を集めました。

リガ市長のウシャコフス氏からは、桃井さんがラトビア・日本間の文化関係発展に大きく貢献したとして感謝の意が表され、2014年の欧州文化首都に選定されている同市の活動にとって重要な意味を持つと、桃井さんにかかる期待が述べられました。

マーティンソンス監督の次回作「Tempura」にも出演する予定の桃井さんが、今後も映画のみならず、文化・観光の分野で日本とリガ市の交流を大いに盛り上げてくれることでしょう。



長内敬大使とギンズーリス氏

◆キンズーリス・ラトビア剣道連盟会長
に対する外務大臣表彰について
※駐ラトビア日本国大使館より情報をいただきました

日本国外務大臣は、毎年、日本と諸外国との友好・親善関係の増進に極めて大きな役割を果たした個人・団体に対して、その功績を称えるため表彰状を授与しています。7月25日、日本外務省が発表した今年の受賞者には、ラトビア剣道連盟会長のウラディミールス・キンズーリス氏も含まれ、ラトビアからは初の受賞者となりました。同氏に対する表彰状と記念品は、8月、長内大使より伝達されました。キンズーリス氏は、ラトビアにおける日本の武道の普及に長年取り組んできましたが、その功績が高く評価されたものです。

【寄稿】キンズーリス氏の外務大臣表彰にあたって

平田純一さん（前神戸市役所剣道部長・前神戸市剣道連盟副理事長）



キンズーリスさん（後列左から2人目）を囲んで

キンズーリスさん、外務大臣表彰おめでとうございます。その表彰の理由が、ラトビアにおける剣道の普及に貢献した、というものであり、又、たまたま剣道交流のためにラトビアを訪問し、ラトビア大学の体育館で剣道の稽古をしている時に表彰状の授与式が行われ、私も臨席したため、なにか私が表彰されたようなうれしい気持ちであります。

振り返ってみますと、今から6年前、キンズーリス氏からの要請で、私がリガ市を訪問したのが彼との交流の始まりでした。そもそも、リガ市と神戸市は姉妹都市の関係にあり、その関係でラトビアと神戸の剣道交流が始まったのですが、このあたりの経過については以前に報告させていただきましたので割愛させていただきます。

それ以降、細々とではありますが、毎年行ったり来たりで剣道交流は続いています。今年は私と、横山君の2名がリガ市を訪れ、約1週間の日程で剣道交流を行いました。

今年は、近年、剣道は世界的に認められ、世界大会も開かれるなど、海外での剣道人口も徐々に増えて来ているようですが、ラトビアではまだまだマイナーなスポーツです。ラトビア全体でも剣道人口は数十人程度ではないかと思います。何故剣道を始めたのか、と彼等に聞くと、武道に興味があったから、というような答えが帰ってきます。私なりに解釈すれば、東洋の神秘主義的な文化の一つとしての剣道像にあこがれているのではないか、というような気がします。



私自身リガ市を訪問して感じたのですが、彼らの文化は、要はキリスト教文化であり、絵画や音楽だけでなく、それが生活の隅々まで浸透しており、これでもか、これでもかという感じで出て来ます。その中に居ると、本当にげっぶが出るような感覚を持ちました。このような感覚は東洋人である私だけでなく、彼らもそうではないかと思いました。もちろん、キリスト教文化は、それはそれで立派な文化であります。そんな中で、日本の、あるいは東洋の文化に接すると、非常に新鮮な感じを受けるのではないかと思います。剣道は、現在ではスポーツ競技の一つとして位置付けられていますが、その武道精神は日本の社会に深く根付いているのも事実です。日本の伝統文化として世界に伝えて恥じない文化だと思います。

今のところ、剣道交流は技術練習が主であります。これを継続して行くことにより、剣道の究極の理念である、相手に勝つことではなく己に勝つこと、そのために日々鍛錬を繰り返すのである、という武道精神を伝えることが出来ればと思っている次第です。

一方、ラトビアにも優れた伝統や文化があります。今回の訪問は、リガ市生誕810年を記念するリガフェスティバルの日程に重なり、幸いにも私共もその一端に参加することが出来ました。そのメインイベントである「R i g a L e g e n d」では、ステージでの「リーガ、リーガ、〇〇〇〇、リーガ、」という歌声に合わせ、多くの観客が口ずさみながら踊っていました。歌の内容は私共には理解出来ませんが、彼等の伝統や文化に対する誇りが実感出来る体験でした。彼等の人間性を形作っている810年の歴史から、私共が学ぶ事はまだまだたくさん有ると思いました。

剣道用語の中に、交剣知愛という言葉があります。剣を交えて惜しむを知る、と読みます。剣道を通じて互いに理解しあい、人間的な向上を図ることを教えた言葉です。あの人とはもう一度稽古や試合をしてみたいという気持ちになること、また、そうした気分になれるような剣道をしなさい、という教えを解いた言葉です。まさに交流だと思います。私も、ラトビアに来てその伝統や文化を実感し、ラトビアの人と剣道をすることによってその人間性に直接触れ、多くのことを学ぶことが出来たと思います。そして今後も多くの人々が、交流を通じてそれぞれの人間的な向上をなして行くことが出来れば、と願っております。あまり大したことは出来ませんが、細々とでも良いので、今後も剣道を通じた交流を続けて行きたいと思っています。

【寄稿】大使館で行われたオレグスさんの壮行会

池田裕子さん（関西学院・JLSK 理事）



クリスマスに欠かせないチーズと灰色のエンドウ豆

12月13日午後6時半より、駐日ラトビア共和国大使館でクリスマス・パーティーが開かれました。今回は、日本での任期を終え、間もなく帰国されるオレグス・オルロフスさんの壮行会を兼ねたものでした。「プリエツィーグス・ズィエマスヴァートクス！」（Merry Christmas!）。私はリンダ先生から教わったラトビア語でペーテリス・ヴァイヴァルス大使とオレグスさんにご挨拶しました。

はじめに、日本ラトビア音楽協会の藤井威会長がオレグスさんへの感謝の気持ちを英語で述べられ、協会からの記念品を贈呈されました。引き続き、同協会員による演奏（河西麻希さんのサクソフォン、北條加奈さんのメゾソプラノ、東原貞彦さんのバス）が行われました。目の前で披露される素晴らしい演奏に出席者一同、大いに魅了されました。



演奏が終ると、ヴァイヴァルス大使がオレグスさんに対する感謝の言葉を英語で語られました。この通訳（英語→日本語）をオレグスさんは難なくこなされましたが、外国語から外国語への通訳なんて、凡人にできることではありません！ そんなオレグスさんでも、ご自分に対する賛辞を訳すのはとてもやりにくかったようです。かなり控えめな日本語になっていました。でも、照れておられる様子から出席者には十分伝わったことと思います。「今度日本に来る時は特命全権大使として」との大使のお言葉に、約150名の出席者の心はひとつになりました。

大使からの最高の賛辞に対し、オレグスさんも英語で挨拶されました（通訳も自らなさいました）。初代駐日大使を支え（オレグスさんにとって大使は「最初にして最高のボス」だそうです）、日本で人脈を築き上げるのは本当に大変なお仕事だったと思います。大使のみならず、多くの日本人（特に女性）にとってもオレグスさんの存在は心の支えでした。

オレグスさんのもとには数多くのプレゼントが寄せられ、写真撮影希望の声が次々にかかりました。もちろん、私もツーショットでお願いしました。撮った写真を確認して「夫婦みたい」と言ったら（実際は、どこから見ても母と息子なのですが）、「ホント？ 池田さんにそう言ってもらえて、私も嬉しい」と、百点満点の答えを返してくださいました。



オレグスさんは、1月から外務省で二国間経済関係のアジア担当として勤務されるそうです。「2年間はラトビアにいますので、ラトビアにお越しの節は必ずご連絡ください」とのことでした。

オレグスさん、長い間本当にありがとうございました。あなたを失い、多くの日本女性は涙にくれることでしょう。

【寄稿】ラトビア訪問記

名島弘尚さん（大和ハウス工業株式会社）

私は今年7月、会社から派遣され参加している「不識塾」の海外調査でラトビアを訪問しました。不識塾とは、中谷巖氏（元多摩大学学長で、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社理事長）が主催している私塾で、日本の主要企業で各業種から1名ずつ参集し、通常のビジネススクール的なカリキュラムではなく、哲学・歴史・文化・宗教・倫理などリベラルアーツ教育を通じて、歴史観・大局観を養い経営に生かしていこうという塾です。



ラトビア外務省前にて（後列右から二人目が筆者）

塾生は1チーム7名で4チームに分かれ、今回は「世界と日本の文明を知る」というテーマの中で、それぞれのチームが調査目的並びに調査地域を塾生自らが選定し訪問しました。我々のチームは、ドイツやロシアをはじめとする大国に挟まれ、蹂躪されながらも、各民族はアイデンティティを失うことなく独立を果たしたバルト三国に注目を致しました。特筆すべきは、約200万人の人々が手をつないで実現した長さ600km以上の「人間の鎖」、民族の過酷な歴史を記した民謡を数万人の人々が合唱する「歌う革命」と言われるように、非暴力の独立運動を貫き通したことにあります。

700年以上も他民族の支配を受けながら、なぜ固有のアイデンティティを保つことができたのか。大国の狭間でどのような戦略と気概をもって生き残ってきたのか。

また、彼らと同じく、我が日本も、50年来の同盟国であるアメリカと経済発展目覚ましい中国という軍事・経済大国の狭間に身を置き始めており、国家としての歴史的分岐点を迎えるようとしています。大国の間で生き延びてきたバルト三国とその民族アイデンティティに、何か学ぶことがあるのではないかと。そのような問題意識で、我々はバルト三国の調査・研究を始めました。

訪問先としては、バルト三国のうち、ラトビア・リトアニアそして大国側としてロシアを訪問することとしました。ラトビア訪問に先立って、昭和女子大の志摩園子教授並びに、在日ラトビア共和国大使館のペーテリス・ヴァイヴァルス特命全権大使、オレグス・オルロフス次席にお話をお伺いすることができました。ヴァイヴァルス大使からは、ラトビアの歴史・文化など貴重なお話を頂戴するとともに、ラトビアでの訪問先として元ラトヴィア文化相で現ラトヴィア協会会長のカーリーナ・ペテルソーネ氏をご紹介頂きました。

7月10日に日本を発ちモスクワ経由で7月11日の朝リーガに到着しました。その日は日曜日でもあったため、市内視察日とし、歴史博物館、占領博物館、サラサピルス強制収容所跡、軍事博物館、アルベルタ通りの独創的なユーグントシュティール建築物などを視察して回りました。とにかく街全体がとても美しいというのが、私の第一印象でした。



蛇が十字架を囲んだ岩（歴史博物館）



モロトフ＝リッベントロップ協定（占領博物館）

まず訪れた歴史博物館で目についたのは「蛇が十字架を囲んだ岩」でした。13世紀のドイツ騎士団によるキリスト教化に始まり、現在はキリスト教の国との基礎知識を得てはいたものの、古くは農業に根ざし自然と共生する自然崇拝の国であったことが確認でき、キリスト教と自然崇拝とのかかわりを非常に興味深く感じました。

次に訪れた占領博物館では、モロトフ＝リッペントロップ協定の写真に驚かされました。ヒトラーとスターリンの写真の間に掲示されている地図に一本の線が引かれているのですが、勝手に領土を定めているのです。

翌日は、バルト三国で最大の市場で買い物をすませた後、歌の祭典の行われる森林公園を訪れ、我々も全員で「ふるさと」を合唱しました。観客は散歩中の老夫婦のお二人だけでしたが、大きな拍手を頂きました。午後からは、ラトヴィア投資開発公社のエラーツ氏、元ラトヴィア文化相で現ラトヴィア協会会長のペテルソーネ氏、在ラトヴィア日本大使館の長内大使のお話をお聞きするため、各所を訪問しました。



ラトヴィア投資開発公社での講義風景



カリナ・ペテルソーネ氏の講演（外務省）

ヴァイヴァルス大使にご紹介を頂いた、ラトヴィア協会会長のカリナ・ペテルソーネ氏には、外務省の国際会議場に招き入れて頂き、歴史や文化について、ご講義を頂きました。在ラトヴィア日本大使館の長内大使には、大使公邸にて歴史・経済について約1時間にわたってご講義を頂きました。

翌朝、リトアニアに向けて飛び立ちました。わずか2泊3日の滞在でしたが、とても美しい街並みと緑豊かな自然にふれることができました。また、ラトヴィアのことを大切に思っておられる多くの方々のお話を聞くことができ、改めてアイデンティティの高さを肌身を持って感じることができました。ラトヴィアを訪問して本当に良かったと感じています。最後に、多くの方のご協力・ご支援を頂き改めて感謝致したいと思います。



【謝 辞】

在日ラトヴィア大使館のヴァイヴァルス大使、オルロフス次席に感謝いたします。昭和女子大の志摩園子教授には、食事場所など女性ならではのアドバイスを頂き感謝致します。

調査先では、ラトヴィアの政治経済社会情勢の質疑応答について真摯にご対応くださった、ラトヴィア投資開発公社のエラーツ氏、元ラトヴィア文化相で現ラトヴィア協会会長のペテルソーネ氏に、深謝いたします。

更に、長内大使をはじめ在ラトヴィア日本大使館の方々、また、お名前を挙げた以外の方々からもご協力、ご指導をいただきましたこと、心より感謝の意を表します。誠にありがとうございました。



長内敬大使（右から3人目）とともに

【不識塾】（敬称略）

塾長 中谷 巖（一橋大学名誉教授）

塾生 ダイキン工業 空調営業本部

空調営業本部副本部長

楽 篤樹

大和ハウス工業 東京支社経理部長

名島弘尚

トプコン ファインテック

ビジネスユニット技師長

磯崎 久

日本通運 総務・労務部 労働専任部長

横山龍太郎

東芝 商品統括部 企画業務部部長

荒引靖久

スルガ銀行 パーソナルファイナンス部長

小島政彦

NTT ドコモ マーケティング部

マーケティング統括担当部長 齋藤 武

◆「にっぽん—大使たちの視線」写真展 開催

12月9日から来年1月28日まで、神戸市の「ひょうご国際プラザ」にて日本に駐在しておられる外交官やそのご家族がとらえた現代の日本の風景を写真で表現する「にっぽん—大使たちの視線」写真展が開催されています。於：ひょうご国際プラザ 交流ギャラリー

(神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番1号 国際健康開発センター2F)

ラトビア共和国大使館のヴァイヴァルス大使とオレグスさんの写真も展示されています。ぜひご覧いただければと思います。本展覧会は今回で14回目を迎え、今年度のテーマは、東日本大震災後の日本の現状を踏まえて、「Resilient and Dynamic Japan 元気なニッポン」です。

外交官として日本にて震災を体験した33の国と地域、50名の方々が、復興へ向かって進んでいく日本の人々への思いを写真に託して表現されています。



踊りの力、奈良
Power of Dance, Nara

「踊りの力、奈良」
ヴァイヴァルス大使の作品



世界的に風光明媚なマラソンのひとつ、河口湖マラソンと富士山
One of the most scenic marathons in the world-Kawaguchiken
Marathon and Mt.Fuji, Kawaguchi Lake, Yamanashi Prefecture

「世界的に風光明媚なマラソンのひとつ、河口湖マラソンと富士山」
オルロフス・オレグスさんの作品

◇ラトビアの隣国エストニアの名誉領事館が大阪に開設されました◇

名誉領事には、菓子製造会社「千鳥屋宗家」社長の原田太七郎さんが就任されておられます。すでに開設済みのリトアニア名誉領事館（名誉領事：大林組大林剛郎会長）とともにバルト3国の名誉領事館が揃い踏みを行いました。



大阪船場のビジネス街にたたずむ千鳥屋大阪本店内の在大阪エストニア共和国名誉領事館にて

原田名誉領事は、経済人として欧州との交流も深く、2010年12月に名誉領事に就任され、今年10月には、同社大阪本店がある本町通りのビルの3階を改装して名誉領事館を開設されました。

【在大阪エストニア共和国名誉領事館】

〒541-0053 大阪市中央区本町3-4-12 電話：06-6261-0303 ファックス：06-6261-0303
(管轄区域：大阪府、兵庫県、奈良県、京都府、和歌山県)

【寄稿】 リガコレクション

川島容次郎さん（株式会社ジービーエス 代表取締役）

2011年9月21日、午前11時、リガコレクションのラトビアツアー一行21名は成田空港を飛立ち、ヘルシンキ経由ラトビアのリガに向かいました。リガコレクションに来て下さるお客様たちの「リガコレクションならではのラトビアツアーに行きたい！」という要望で、年初から準備をして催行したツアーです。

現地では、夏に来日されたカンパルス経済大臣の歓迎昼食会、ライ麦パンを石釜で焼き、ビール醸造所で出来立てのビールを味わい、陶器工房訪問、スパでサウナを楽しみ、湿地帯の散策、オペラを鑑賞、などなどたっぷりラトビアを楽しんで頂きました。



リガのブラックヘッド会館の前で(左端が筆者)

「リガコレクション」は、2010年7月24日に、ラトビア商品とラトビアの文化を紹介し、日ラ両国の文化交流の拠点にしたいとの思いで、東京の中目黒駅前に開店しました。

「どうしてあなたはラトビアのお店を開いたのですか？」お客様からも、ラトビアに行ってもこの質問を受けます。

ラトビアとの関係の始まりは私の兄が約40年前にアメリカに留学し、その時に父親のように面倒を見てくださった方がラトビアの方だったことから始まります。その方への恩返しという思いで兄が5年前から毎年夏にボーイスカウトの若者をラトビアから富士市に招待し、次の年には日本からラトビアに派遣するという青少年交換プログラムを行っています。

私も何かラトビアのお役にしたいと考えていたところ、私の家内から「ラトビアはとてもおしゃれなリネン、ニット、キャンドルなど素敵なものがたくさんあるから、それを紹介するお店をやったらどうでしょう」という提案があり、4月1日に大使館に伺い、バイバレス大使、オレグス次席、投資開発公社（LIAA）のドミトリスさんに私たちの考えをお伝えしたところ、

大使は「ラトビアに特化したアンテナショップは未だどこにもないので、大使館としてサポートするからは是非やってほしい。いつ開店するのか？どこでやるのか？そこをすぐに観に行きたい！」とおっしゃって直ちに中目黒に向かいました。

ここから慌しい開店準備が始まり、5月にはラトビアに商品の買い付けに行き、リガではLIAAのザネさんに3日で20社ほどとの打ち合わせをアレンジしてもらい、商品の買い付けを行いました。このような慌しさで「リガコレクション」が開店しました。

ほとんどのお客様は「ラトビア？どこにあるんですか？どんな国なの？」という感じでしたが、この一年半の間に、歌と踊りの祭典の写真展、児童画展、クリスマス会などを企画したり、池袋西武と銀座三越で販売させていただいた事もあり、ラトビアの認知度が少しずつですが上がってきていることを実感しています。毎月中旬にはフレッシュなライ麦パンを空輸してお客様に紹介していますが、今まで日本には無かった「本物のライ麦パン」が食べられるととても喜ばれています。これもささやかなラトビア文化の紹介かと自負しています。現地メーカーには商品の改善を求めたり、日本のお客様に満足してもらえるように話し合ったりしていますが、ビジネス習慣や文化の違いなどがあり、これからやらなければならないことが山積しています。

これからもラトビアを日本の皆さんに知っていただけるよう、地道な民間外交に取り組んでゆきたいと考えています。



ダウ川のほとりで、カンパルス大臣を囲んで



リガコレクションの店内

★東郷名誉領事が広島の中学生たちにラトビアの魅力を講義★

11月16日に、広島市立可部（かべ）中学校の3年生6名が修学旅行中の国際学習の一環として、在大阪ラトビア共和国名誉領事館（大和ハウス大阪ビル1階）を訪れました。

東郷武名誉領事とともにラトビアの紹介DVDを視聴したり、民族衣装や工芸品などを使ってラトビアの文化や伝統について楽しく説明が行われました。



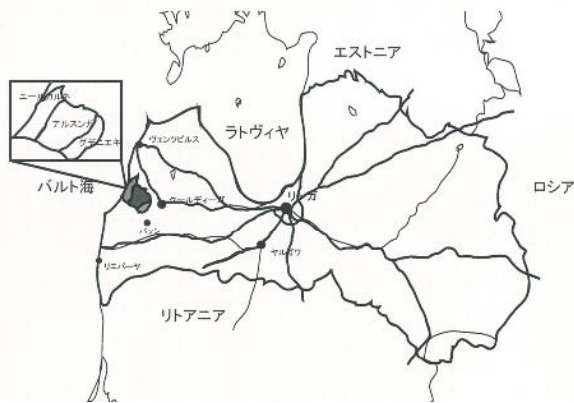
やや緊張の面持ちの生徒たちに民族衣装を使ってご説明



名誉領事を囲んでなごやかに記念写真の撮影

【寄稿】「アルスンガ村での温かな生活」

鶴田宜江さん（京都大学人間環境研究科 修士課程）



アルスンガ村の位置

「たくさんの荷物をラトビアに持ってきて、なんで分厚い靴下を持ってきていないんだ。えー、おー。」

私がアルスンガ村でマリヤおばあちゃんに初めてあった時に、彼女はこの歌を即興で歌い、薄着の私に厚いコートを貸してくれました。昨年と今年の2ヵ月間、私はラトビア共和国アルスンガ村で「スイティ」とよばれる人々の1人であるマリヤ＝ステイマネさんの家にホームステイしていました。

私は、日本の大学で文化人類学を専攻し、ラトビアの文化の研究をしています。研究対象は、このアルスンガ村のスイティの人々の「ブルドーン」です。

「ブルドーン」とは、スイティの人々が歌う即興歌です。1人目が即興で歌詞を作り、節に乗せて歌い、2人目がそれを繰り返し、残りが「えー、おー」と声を合わせて歌います。

2010年の夏至を控えた日に、フィールドワークの事前調査として初めてアルスンガ村を訪問しました。



スイティ婦人たち

2010年6月23日、まだひんやりと涼しいリーガの旧市街が民族衣装を着た人々で賑わいます。人々はオークや野花の冠を頭に被り、初夏の訪れを心待ちにしています。街のにぎわいを尻目に、私はスーツケース1つ持ちリーガから4時間バスに揺られ、アルスンガ村に向かいました。

アルスンガに住む人々がスイティと呼ばれる所以は、500年前の恋のお話に遡ります。16世紀に、アルスンガ領主のヨハン＝シュヴェリンがポーランドの貴族の娘バーバラと恋に落ちました。しかし当初、プロテスタントを信仰していたシュヴェリンはカトリック信者のバーバラの両親に結婚を許してもらえませんでした。

そこで、シュヴェリンはアルスンガの村人たちと共にカトリックに改宗することで、バーバラとの結婚を成就させました。ラトビア全土ではプロテスタントが主流であるのにも関わらず、アルスンガを含めたスイティ地方がカトリックを信仰しているのはこのためなのです。シュヴェリンはカトリック信者を優遇し、信者を見分けるために、現在のような派手な色彩の民族衣装を着せたとされています。そしてシュヴェリンの名前がもとで、この地方でカトリックを信仰する人々をシュヴェリン＝スイティと呼ぶそうです。

スイティに何の地縁もなかった私は、始め興味本位で訪れたアルスンガ村で路頭に迷っていました。困っていた私を拾ってくれたのは村長のグリゴリウスでした。彼は、「どうにかなるさ、やってみよう。でも、この村に住むためにはラトビア語を話せないと生きていけないよ。」と、ラトビア語の拙い私に忠告してくれました。それもそのはず、ラトビアの市町村の中で2番目に小さいアルスンガ村の住民約1600人はほぼ全員がラトビア人、しかも西部訛を持ったラトビア語はリーガで聞きなれたラトビア語とも何か違います。途方に暮れていると、夏至祭の「リーゴー、リーゴー」という歌が聞こえてきました。アルスンガで、夏至祭が始まったのです。

人々は火の周りを囲み、陽気に歌い踊ります。アジア人を生まれて初めて見て驚く人も多かったのですが、陽気にビールを振る舞い歓迎してくれました。そして一晩中、手を取り合い一緒に歌い踊り明かしました。これほど温かい人々なら、どうにかなりそうだと何の根拠もない自信が湧き、ここで本調査をしていくことを決め、二度目の訪問を2010年8月に果たします。

そして8月、「いざ、アルスungaへ！」と、バスに乗り込んだものの、着いたバス停にいるはずのグリゴリウスがいませんでした。携帯電話に何度も電話をかけても繋がりません。私は孤独と不安に涙をこらえながら、とりあえず教会を目指しました。

教会には、前回の訪問で友人になったクリスティーネという民族衣装を作る女性が住んでいたからです。再訪に驚いたクリスティーネがグリゴリウスに連絡をとると、彼は時間を間違えていたのです。



夏至祭の様子

そして、滞在先を探してもらった末に、一人暮らしをしていたマリヤの家を紹介してもらいました。

私がおその日にやってくるのをマリヤは全く予期せず、驚くマリヤに私は片言のラトビア語で自己紹介をします。すると、マリヤは冒頭のブルドーンを歌いました。8月下旬にもなると、早くもアルスunga村では冬仕度が始まります。毎日薪を割り、暖炉で火を焚かないと寒い夜は眠れません。マリヤは79歳。娘や息子は既に独立し、家を出てしまったので、マリヤは、1人で大きな家に暮らしています。彼女は「スイティ婦人たち」というアルスungaの民族合唱団で13歳の時から歌っています。



畑仕事風景

スイティの女性たちは歌なしでは生きていけません。命名式、結婚式、葬式、あらゆる通過儀礼には歌が歌われます。夏至祭や冬至祭など、年中行事にも歌は欠かせません。労働歌や遊び歌、日常生活のあらゆる場面で歌が聞こえてきます。

マリヤおばあちゃんと、大きなロシアを飛び越えて小さな村にやって来た小さな日本の娘の生活が始まりました。村は収穫期で毎日、じゃがいも掘りで大忙し。私も頭巾を被り、長靴を履き、じゃがいもや人参、ビートなどの畑の宝を掘りました。それらを地下室に運びこむと、地下室は冬に備えて満杯になります。

スイティの家庭には1軒に数頭の牛が飼われています。女性は牛の乳しぼりが日課です。必ず朝と夜の1日2回乳を搾らなければなりません。夜遅い会合の際には、「乳搾りがあるから」と言って帰っていく女性を多く目にしました。



牛乳マシーン

乳搾りはとても力のいる仕事ですが、スイティにとって乳は大切な食べ物です。牛乳は牛凝（biezpients）、クリーム、ケフィア、バター、チーズに加工され、毎日の食卓に並びます。また、森に出かけて美味しいキノコやクランベリーを採りに行きます。毎週土曜日の夜になると、庭にあるサウナに入り、そのまま池に飛び込みます。スイティの人々は自然の中で、自然と共に、自然に支えられて生きています。限られた資源を活用し、与えられた恵みに感謝して、人と自然を愛する温かな心を持っています。1度目の訪問で感じた人々の温かさとは、きっと人と自然を愛する気持ちが感じられたからだ気づきました。私は、今年の9月に3度目の訪問を果たしました。マリヤおばあちゃんは1年前より少し衰えた気がして、再会した時は少し悲しい気分になりました。しかし、彼女の歌声は変わりません。力強い芯のある声でアルスungaの情景歌います。彼女の声は山を越え、海を越え、遠く遠く響き渡り、ここ日本にも聞こえてくるようです。（次ページへ続く）

【下記写真】

(左・中) 日本文化を紹介するイベント

アルスンガの人々に日本を紹介するイベントを催しました。日本舞踊、三味線（日本から持参）、習字、折り紙、寿司作りと盛りだくさんで大盛況でした。

(右) 小学校訪問

アルスンガ小学校に訪問し、鶴の折り方を教えました。小学生は大喜びでした。



★ラトビア共和国をご存知ですか？★

京都大学 11 月祭 ラトビア文化研究会展示会

11 月 25 日から 26 日まで京都大学大学院生の鶴田宜江さんが、母校の学園祭でラトビアについて紹介する展示会を行い、オリジナル写真や民族衣装などを展示されました。



中央：鶴田宜江さん、左：見学に来られた溝口明子さん

右：鶴田さんの先輩の関健次郎さん（マダガスカルの生業研究をされているそうです）

【編集後記】2011年を振り返れば、国内の出来事では東日本大震災、グローバルには欧州のソブリンリスクが大きな出来事として記憶に残ります。リーマンショックからようやく立ち直りつつあるラトビア経済にとっても目が離せない問題です。ちなみにラトビア投資開発公社の長塚さんから年末恒例の「ラトビア2011年の動き」として下記の項目をあげていただきました。

【平成23年12月5日現在。詳細は後日メールにて配信されます】①ラトビア議会・臨時総選挙②カンパルス経済相の訪日③ラトビア投資開発公社新駐日代表④新滞在許可制度の導入⑤「不識塾」代表団の来訪⑥三菱東京UFJ銀行調査団の来訪⑦伊藤忠代表の来訪⑧テレビ東京取材チームの来訪⑨双日代表の来訪⑩2011年輸出・イノベーション賞⑪ラトビア産業視察ミッション2012の企画などなど、・・・内政から経済交流まで様々な出来事があり、私たち協会も関わらせていただいた項目もあります。

今回寄稿していただいた不識塾・名島さんとともにラトビアを訪れた経済学者である中谷巖氏は、その目的として「バルト3国のジレンマは対ロシア安全保障にあり、そのためEUやNATOに加盟したが、西側世界に入ると今度は巨大資本に翻弄されることになる。リーマンショックでは巨額な被害を受け失業率も20%近い水準にまでになった。私達は、東はロシア西はドイツという大国に挟まれ歴史的に苦渋を味わってきたバルト3国の経験を学ぶことで、東はアメリカ、西は中国という大国に挟まれているわが国の進むべき方向への示唆を得ることができるのではないかと語っておられます。ちなみにラトビアも加盟する欧州連合（EU）では正式な文書や会議で使う公用語が、23カ国語もあるそうです。本部のあるブリュッセルには「通訳総局」という専門のお役所であり、同時通訳者だけで約千人もの職員がいるそうです。まさに多種多様な文化や思想の中で同じ方向へ向かう難しさを象徴しているようにも思えます。

難しい問題はさておき、皆様のご支援で当協会の活動は丸3年を過ぎました。ささやかではありますが様々な交流を通じてラトビアという国が年々身近になってきたのではないかと思います。また長年剣道指導をされる平田さんをはじめラトビア産のグッズ輸入をされる川島さん、単身で小さな村を訪れおばあちゃんと暮してこられた鶴田さんのような方もおられることに改めて驚きました。このような方をご紹介しながら、人と人のつながりを大事にして日本とラトビアの交流に少しでも貢献していければと思います。引き続き変わらぬご支援ご協力をお願いいたします。

なお8月以降、協会に加入いただいた方は、木村咲子様・三木保人様 のお二人です。改めてご入会に感謝いたします。また最後になりましたがお世話になりました大使館のオレグスさんへ「Thank You For Your Kindness!」（事務局金井）